

# ブックレビュー



## 『体験格差』

今井悠介 著

講談社 刊

定価 990円 (本体 900円+税)

貧困の連鎖が子どもの習い事や家族旅行などの「体験格差」を生み、子どもの成長に大きな影響を与えている。そんな実態が、「お金」「放課後」「休日」「地域」「親」などとの関連で浮き彫りになる。

本書は、2022年暮れに公益社団法人チャンス・フォー・チルドレンが発表した国内初の「子どもの体験格差に特化した全国調査」をもとに、代表理事を務める1986年生まれの著者が取りまとめている。印税は同法人を通じて「体験格差」の解消に向けた活動に充てるといふ。

3部構成からなり、第1部の「体験格差の実態」では、過去1年間に年収300万円未満の「低所得家庭」の子どもの「体験ゼロ」が3分の1近くに上ることを明らかにしている。第2部では当事者の証言を追い、「それぞれの体験格差」に迫っている。主にシングルマザーの子どもの保護

者について「彼女たちの中には、自分の食事を削ってまで子どもの習い事にお金をかけ」「それすら叶わず今は子どもの願いをあきらめさせざるを得ない」実態に光を当てる。そうした現実はどう対処するか。「体験格差に抗う」方策が第3部のテーマだ。

著者が設立した法人はこれまで6,000人を超える生活困窮家庭の子どもを支援してきた。その体験から、「厳しい環境に生まれた子どもたちには、衣食住の支援も、学習の支援も、体験の支援も、すべて必要だ。(中略) そのすべてが届く社会を目指していきたい」と読者に呼びかける。

そのために本書は5つの提案(体験格差の実態調査を続ける、体験の費用を子どもに対して補助する、体験と子どもをつなぐ支援を広げる、体験の場を守るべき共通の指針を示す、体験の場となる公共施設を維持・活用するなど)を掲げている。JAの出番にもどこかでつながる提案だ。

さんかいの げん  
(山海野 玄)